

ネームバリューある山からの撤退

いつだったかの「天声人語」に、思わず笑ってしまったジョークが紹介されていた。「豪華客船が沈み始めた。脱出を促そうと、船長は英国人に『飛び込めばあなたは紳士です』と言ひ、ドイツ人には『飛び込むのが規則となっています』と訴えた。日本人にはこうだった。『みんな飛び込んでますよ』」

なにかの機会にこのジョークを紹介すると、周囲は大笑い。みんな分かっているんだ、と思う。日本人は確かにそういう性癖があり、自分もその一人であるということを…。しかし、ホントに分かっているのだろうか、という疑問が胸の裡に湧かないわけではない。分かっているのなら、断固拒否する気概ある奴が、一人くらいいったていいではないか。

残念ながら、そんな奴は一人もいない。みんなが飛び込んでいりゃあ、自分も飛び込む。プランニングのポイントは、みんながやっていることを見つけ出すことだ。

先日、面白い現象をテレビが伝えていた。我々日本人の常識？では、思いもよらない所に外国人観光客が集まっているのだそう。観光案内書ではなく、インターネットで見つけた面白そうな所を訪ね、そこが面白かったとインターネットで紹介する。と、それを見つけた外国人観光客がそこを訪れる。その繰り返しで、そこを訪ねる外国人観光客は雪だるま式に増え、たちまち新名所に成り上がる。外国人のプランニングのポイントは、日本人とは対極にあるようだ。彼らは、みんながやっていないことを探し出す。

日本百名山を登り終わると、二百名山をめざす。その次は三百名山だ。50歳から登山を始め百名山をめざしたとする。10年がかりで百名山制覇、二百名山をめざすのは60歳になってから。二百名山を10年がかりで制覇したときは70歳。三百名山をめざすのは70歳からになる。百名山より二百名山、二百名山より三百名山と山は困難度と危険度を増す。めざす側は加齢に従って体力は低下、技術も劣っていく。ネームバリューを追いかけるそんな登山を続けていて、事故が起きないはずがない。

古稀を過ぎたら、ネームバリューを追いかける登山はやめにしよう。ネームバリューはないけれど、いい山はある。そんないい山、自分だけの山を探してみないか。探し方は簡単だ。ガイドブックを手にしたらパラパラとページをめくり、山名に馴染みの無い山のページを開く。次の日曜日に出かける山は、その山だ。

加齢に従って足が上がりなくなったら、ネームバリューある山に決別する絶好のチャンスと考えて頂きたい。ぼくの場合、コースタイムが3～4時間の山を探す。近くに温泉があれば文句無し。山のネームバリューの無さを、温泉が補ってくれるからだ。みんなが登っている山ではなく、みんなが知らない山を探す。古稀を過ぎてからの、山プランニングのポイントである。